

パリ通信・第150号

ノルマンディー上陸作戦

1944年6月6日「ノルマンディー奇襲上陸作戦」から80年が経つ2024年6月6日。朝から抜けるような青空が広がるノルマンディーの浜で上陸80周年記念式典が行われた。

4年に渡るドイツ軍占領下にあったフランスを解放すべく、アイゼンハワー総指揮の下、連合軍がシェルブールからル・アーブルを結ぶノルマンディーの5ヶ所の浜「ユタ」「オマハ」「ゴールド」「ジュノ」「ソード」に奇襲上陸した有名な戦いである。



ドイツ軍を撤退させるには大西洋岸から攻めるしかなく、「ノルマンディー上陸作戦」の2年前1942年8月「デイエップ上陸作戦」が実行されたが、事前にドイツ軍が内容を把握しており、デイエップ作戦は連合軍大敗退で無惨に大量の血が流れた。

その敗北に学んだ「ノルマンディー上陸作戦」は、細心の配慮と秘密裏に計画された。イギリスから一番近い

カレーの港に見せかけのゴム製戦車を配し、上陸地がドイツ軍に知られないようアメリカの地名「ユタ」「オマハ」と名付けられた。アメリカ、イギリス、カナダ、ベルギー、ポーランド、オランダ、デンマーク、リュクセンブルグ、ノルウェー、チェコ、ギリシャの兵とパラシュート兵15万6千人が6月6日朝6時から上陸を開始した。

イギリスに亡命していたド・ゴールの精鋭部隊177名がイギリスの制服にフランスベレー帽でイギリス兵と共に上陸した。6月3日イギリスを出航した連合軍艦隊は英仏海峡の悪天候で一旦引き返し、5日夜に延期、6日早朝から5ヶ所の浜で戦闘が始まった。上陸を待つ兵士たちは船酔いに苦しみ、30kgの物資と銃を背負って波に吞まれ溺れる兵士、岸に到達する前に塹壕で待ち構えるドイツ軍に銃殺される兵士、浜は一面の血の海と化した。

オマハビーチに上陸したアメリカ兵34250名中3000名が命を落とした。ユタビーチに上陸したイギリス兵は1465名の死者を出し、連合軍は6日の上陸だけで1万が戦死、ドイツ軍も同じく1万を超える戦死者を数えた。上陸を援護するため、フランス空軍とイギリス空軍はノルマンディー空爆を強化した。空爆でカーン、サン・ロー、バイユーを始めノルマンディーの多くの街が跡形もなく破壊され、上陸後始まった熾烈な内地戦の犠牲になった市民が2万人を超えた。上陸から多大な犠牲を払いながらも7月にはシェルブールが開放され、連合軍はカーン、オルレアンと東に進み、8月25日パリを解放した。フランスが終戦を迎えるのは翌1945年5月8日だが、「ノルマンディー上陸作戦」が終戦へと導いたのである。



オマハ・ビーチに上陸する **アメリカ** 第2歩兵師団

式典には「ノルマンディー上陸作戦」に参戦し生きて帰還した連合軍兵が招待され、生きた証言は感慨深いものがある。上陸は怖くなかったかというインタビューに対して「17歳で上陸作戦に参加し今日で死ぬかも知れないと思った。一年前から周到に訓練し、たとえ隣の兵が倒れても立ち止まらずに前進せよと言われていた。その指示に従った」。別のベテランは「ボートを降りて海に入り最初に見たのが海に漂う若いアメリカ兵の死体だった。陸に引き揚げたいと思ったが自分が前に進むだけで精一杯だった。80年経った今もこのアメリカ兵を忘れられない」。

戦争体験の傷は一生を通して癒えず、これだけ無数の命を犠牲にした事実にも関わらず今日なお戦争が続いていることに心が痛む。



カナダでは「赤いけしの花」が戦死者を悼む象徴だと知った。第一次世界大戦中、カナダ人軍医として参戦したジョン・マックレイ(John McCrae)(1872-1918)の詩で知られ、心臓のある左胸に血の色である赤いけしの花を付けるそうだ。マックレイはベルギーからフランスにかけてのフランドル戦に従軍し、戦後フランスで亡くなった。フ

ランス大西洋岸の戦場となった野には春になると一面に赤い無数のけしの花が咲き、一つ一つの花が犠牲者の魂に喩えられた。戦争を生きた人がこの世を去っていく今、その歴史を後世に伝えていくことの大切さと義務を知らされる。（古賀順子記）

関連記事

（天声人語）ノルマンディー上陸80年

2024年6月7日

ナチス・ドイツに占領されたフランスで、海の向こうのラジオ放送に耳を傾けていたレジスタンスの活動家らは、その夜、内容に息をのんだ。「さいころはテーブルの上にあります、さいころはテーブルの上に……」。待ちに待った友軍の上陸に備えよ、という暗号だった▼翌朝、仏北西部ノルマンディーの海と空は、米英などの艦隊と航空機に埋め尽くされた。第2次大戦の戦況を大きく転換させた「史上最大の作戦」。きのうで上陸から80年がたった▼国際秩序を踏みにじり、領土の拡張という己の欲望を満たそうとする人物が現れたとき、世界はどう対抗すればいいのか。21世紀になっても、同じ問いを突きつけられている▼10年前のノルマンディーでの式典は、ロシアによるクリミア併合のわずか3カ月後のことだった。いまとなっては違和感もあるが、そこにはプーチン大統領も招かれ、各国首脳と会談を重ねた。「力づく」の愚かさに気づくよう願ったのを覚えている。だが、そうはならなかった▼あの時、世界がもっと強い態度でロシアに臨んでいたら、その後の悲劇は起きなかつただろうか。「選択と結果」は複雑に入り組みながら歴史をつむぐ。道がどこに続くのか、歩く者にも見通せない▼それでも、人間の未来を、さいころを転がすように運に任せるわけにはいかない。さいころを意味する英語dice（ダイス）は名詞dieの複数形。ウクライナでガザで、同じ綴（つづ）りの動詞「死ぬ」がきょうも強いられている。2024年6月7日 5時00分